令和３年度　前期人権旬間（人権講話）　令和３年５月７日

さて、みんなは人権とは何だと思いますか。これは昨年の人権旬間の時も同じことを尋ねたので、２，３年生にとっては復習になると思います。誰か、答えられる人はいますか。先生は人権とは**「人が、生まれながらに持っているもので、人らしく、幸せに生きる権利」**のことだと思います。もっと、わかりやすく言えば、**自分の、また他人の命を大切にすること**、つまり、人権を尊重する（人権を守る）ということは**「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること。」「自分も大切にできる。他の人も大切にできる。」**ということだと思います。私は、みんなが、それができる人になって欲しいし、なってもらわなければいけないと思っています。

さて、その人権を侵害する行為にはどんなものがあるでしょうか。様々な人権侵害行為がある中で、今日は、差別ということについて考えてみたいと思います。これから校長先生が話す話は、今の３年生が１年生の時に話した話なので、覚えている人もいるかもしれませんが、校長先生が最も尊敬している内の一人の人の話なので、改めて、皆さんに話したいと思います。

まずはこの写真を見てください。**（マンデラの写真を見せる。）**みんなは、この人を知っていますか。名前はネルソンマンデラと言います。アフリカ大陸の一番南側にある南アフリカ共和国と言う国の第８代大統領だった人です。最近では、この写真で、あの国かとわかる人がいるかもしれません。**（ラグビー日本代表の写真を見せる。）**2015 年のラグビーW 杯で日本代表が対戦、逆転勝利で世紀の大番狂わせと言われた相手国。ラグビーが盛んで、2019 年ラグビーW 杯日本大会ではみごと優勝、過去３度、W 杯で優勝したことがあるラグビー強豪国です。

この国は昔、約５０年もの間、国の政府自体がアパルトヘイトという人種差別の政策「人種隔離政策」をとっていた国です。アパルトヘイトとはどんな政策だったかというと、

例えば、**①法律で全国民を４つの人種に分類する。②異なる人種間での恋愛、結婚は禁止**

③人種ごとに隔離された地域に居住。特にヨーロッパ人でない人は不毛の地に居住

④白人ではない人による国政への参加は認められない。（選挙権がない）　などです。

その当時、白人の給料は白人ではない人の**６倍～２１倍**とういう異常な状況が見られました。

こんな国の、政府自らの人種差別の政策、悪政に真っ向から反対したのが、このネルソンマンデラです。彼はこの悪政に立ち向かい、反アパルトヘイト（人種隔離）闘争を率いたことで、**国家反逆罪、終身刑となり２７年間もの間、獄中生活**を送ることになります。ただ、獄中でも、不屈の精神で、アパルトヘイトからの解放運動を続けました。そして、しだいに、国際社会からも、この悪政に対しての非難の声が高まりました。獄中にあってもマンデラは解放運動の象徴的な存在とされ、その釈放が全世界から求められるようになりました。彼は１９９３年に釈放され、実質、人種隔離政策は廃止、その年に**ノーベル平和賞**を受賞するとともに、翌年の１９９４年に、南アフリカで初の全人種参加による選挙が行われ、全国民６０パーセント以上の支持を得て、**南アフリカ初となる黒人の大統領**となりました。

ただ、彼の偉業はこれだけではありません。というかこれ以上の奇跡をこの後に起こしまし

た。この奇跡は**「ラグビーワールドカップ１９９５年の奇跡」**とい言われ、**「インヴィクタス」**という映画にもなりました。実話であるがゆえに重く、そして深く心に残る感動的なヒューマンドラマです。

「許しは魂を自由にする。恐れをも取り除いてくれる。人を許す心は、最強の武器なのだよ」 これは、アパルトヘイト時代に黒人を迫害していた白人達と大統領のボディガードチームを編成する事に抵抗がある黒人達に、大統領が静かにさとす場面での言葉です。

マンデラの大統領就任後、今まで、黒人を迫害してきた白人官僚たちは、「首にされる、左遷されるなど」の報復人事を覚悟します。が、彼は全てを許します。新政府を立ち上げるにあたって、敵であった白人官僚たちに対しても、新政府の運営に協力してほしいと要請します。

彼は国を一つにまとめ、**白人と黒人が互いをパートナーとして認め合える新しい国家**をめざしたのです。**９割が黒人１割が白人という南アフリカ国家を一つにまとめるために何をすべきか**模索していたマンデラは、翌年、自国で開催が決まっている**ラグビーW杯**に注目しました。白人特権階級の誇りでもあるラグビーチーム「スプリングボクス」は黒人たちにとってはアパルトヘイトの象徴でもありましたが、マンデラはチームを解体せずにそのまま継承しました。彼はこう言いました。**「我らの敵はもはや白人ではない。彼らは大切なパートナーなのだ」**と。

新しい明日を築くためには、くだらない復讐に執着してはいけない。「スプリングボクス」は、南アフリカ白人社会の「誇り」でもあるチーム。その誇りをけがせば、感情的に反発することになる。民族の和平をすすめ、国を一つにするためには、互いの「誇り」を尊重しあい、協力して結束すること。**「白人と黒人の選手が力を合わせて国家の誇りをかけて戦うことこそが、民衆をひとつにする最良の方法である。」**とマンデラは確信していました。２７年間投獄され、弾圧と迫害にさらされていたにもかかわらず、その過去を全て許し、ただ前だけを見て進むマンデラの広く、優しい心に深く感動します。

私たちの日々の人間関係も全く同様です。イヤな思いをしたからと言って、それに対して、同じようにやり返せば、また新たな報復（しかえし）に合うだけです。**報復には報復しか生みません。**何か、事が起こった時に、**矢印を自分に向けること。原因や結果を人のせいだけにしない**と言うことが大切だと思います。理由がなければ、もっての他ですが、**理由があったとしても、「人をいじめる」ことは絶対、やってはいけないことです。**それが許されれば、極端な話し、理由があれば人を傷つけていいことになります。まして、**いじめはいじめられた側の受け止め方しだいで決まります。「自分はそのつもりではない」は通用しません。**だからこそ、**人権意識、「自他を大切に思う気持ち」、「思いやりの気持ち」**を持ってください。

スプリングボクス主将フランソワ・ピナールは、マンデラの強い意志を受け、チームを引っ張っていきます。そして全国民の期待を背負い、当時も、そして今も世界最強の強豪オールブラックスとの決勝戦に臨みます。人種隔離政策による制裁措置で８年間、このワールドカップに出場できなかった南アフリカは、この１９９５年大会において、マンデラ大統領のもと、白人、黒

人ともに力を合わせ「One team One country」をスローガンに、決勝戦、史上初の延長戦の末、１５－１２、３点差で、あのオールブラックスを倒し、W 杯、初開催、初出場、そして初優勝を果たしました。

（スプリングボクスのキャプテン、フランソワ・ピナールが、同じ背番号の同じジャージーを着たマンデラ大統領から手渡されたカップを高々と差し上げた瞬間に、大統領も拳を突き上げてガッツポーズ。）この光景は、この大会を象徴するだけではなく、近年のスポーツ界での名場面として世界で広く記憶されており、英国のテレビでは「スポーツにおける偉大な瞬間 100」の 1 つとして取り上げられました。その後、南アフリカは２００７年 W 杯で、そして、記憶の新しい所、直近である一昨年の２０１９年 W 杯日本大会でも優勝し、あの世界最強のオールブラックスに並び、ラグビーW 杯、過去３回優勝という、快挙を成し遂げました。

マンデラは２０１３年９５歳でこの世を去るその日まで人種差別という差別をなくすために戦い、生涯を民族和平に捧げノーベル平和賞やユネスコ平和賞などを受賞、彼の歩んだ自由と平和への道のりは全世界へ多く教訓を残しました。彼が残した言葉には、こんな言葉があります。

「人種差別は魂の病だ。どんな伝染病よりも多くの人を殺す。悲劇はその治療法が手の届くところにあるのに、まだつかみとれないことだ。」と。

また、こんなことも言っています。

「生まれたときから、肌の色や育ち、宗教で他人を憎む人などいない。人は憎むことを学ぶのだ。もし憎しみを学べるのなら、愛を教えることもできる。
愛は、憎しみに比べ、より自然に人間の心にとどく。」

まさに、南アフリカの父として人々の心を支え、常に、人々の幸せを追い求め、人権尊重の精神とどんな運命にも負けない不屈の精神を持った人でした。

最後に、これらの人種差別も含めたすべての差別を生む原因の一つに、「人は他人との違いを優しく、広く受け入れるのが苦手。」という特性があると思います。何か、自分と違う、態度や行動が気になり、受け入れられずに、特別扱いしたり、無視したり、笑ったり、仲間はずれにしたり」、自分も、「そうされるのがイヤだから、集団に無理に合わせたり」、これが、いじめに発展するケースが多いと思います。でも、よく考えてみてください。この世の中、まったく同じ人がいますか？**人は違って、当たり前なのです。「人は違って、みんな、いい！」**です。どうか、友人や周りの人達の違いを、広く、大きく、そして優しく受け入れられる、寛大な人になってください。

生徒全員が、**自分を大切にできる。そして、他の人も大切にできる。**そんな学校に、この上柴中学校を、みんなの力でしていきましょう。今日は、ネルソンマンデラをとおして人権について考えていただきました。